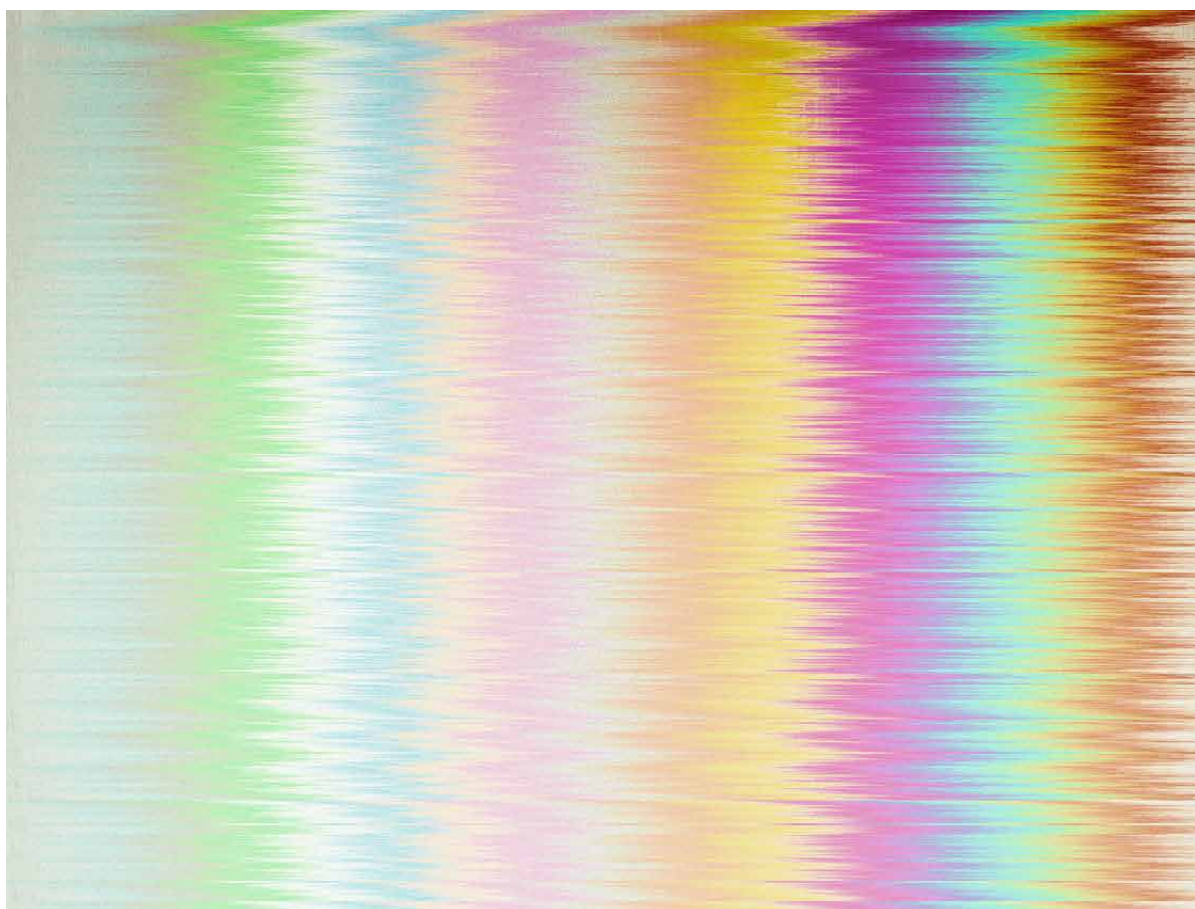


子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2025年11月 NO.241



[もくじ]

- 2～3 タダコフの写真…武内忠昭
- 4～5 アートと地域が交わる場所—高知大学における芸術教育を今問う…吉岡一洋
- 6～7 心から楽しむ…尾崎里美
- 8～9 今年いちばん面白いミステリは？と聞かれたら何と答えるか決まりました…山中由貴
 - 10 森本忠彦先生の思い出…山岡良仁
 - 11 「アンテナ」夢をつかんだ二〇二五年の夏…下尾 仁
- 12～13 高知市文化振興事業団7～8月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「しきさい」小川博輝

公益財団法人高知市文化振興事業団

タダコフの写真

武内 忠昭

タダコフって誰？

ボクと出会った人の第一声は「どうしてTADAKOVっていうの？」だ。この夏出会ったウクライナの写真家も、不思議な顔をして「ロシア人？・・・じゃないよね（笑）」だ。

二十五年ぐらい前だろうか？高市の高見にgraffitiというギャラリーがあった。その名物オーナー信田さんと次の個展のことで話していた時、「ほら写真家とか作家にはあだ名というか、作家ネームがあるじゃんか？タケウチには何かないの？」と訊かれ、ボクが遊びで作っていたおとぎ話の主人公にタダコフ博士と言うマッドサイエンティストがいる

と話す。「よし！今日からオマエはタダコフだ！」というところで、その日から写真家タダコフとなっていました。もちろんタダコフと名乗っても無名に等しい。だから毎回「タダコフって誰？」って説明しなくてはならないのだ。

さて、気が付けばボクの作家としての活動歴もそろそろ三十年。県内での個展も二十回近くになっている。しかしそもそもボクは写真を仕事としていたわけではない。本格的な作家活動も四十歳をこえてからだ。子どものころからアートが好きで、写真に触れたのは中学の修学旅行のために父が買ってくれたコダックのポケットカメラ。でもボクは自分が撮るより、作家

が撮った写真を見る方が好きだった。二十歳の時、大学辞めて写真学校に行こうと思ったのだが、親の反対にあって直ぐ断念。それくらいの気持ちだったのだ。あとは趣味でのお散歩写真。三十五歳で東京から戻り、時間が出来たので地元の写真クラブに入り、コンテストなどに応募や個展などを始めていた時にどんな因果か、再び転職した先に写真スタジオがあり（実は就職するまでそこにスタジオがあるとは知らなかった）、そうこうするうちに上司が新聞に作品と名前が出ていたのを見つけ、スタジオの仕事を任されるようになったというわけなのだ。その五年後に独立し、今がある。結果

二十歳の時に自分が夢に見ていた写真撮影が四十歳になって仕事になったというわけである。人生って不思議なものだ。

最近よく、定年を過ぎた同級生に「オマエは好きなことが仕事になっていいなあ」と言われる。確かに好きなことには定年がない。少なくとも作品作りには終わりがいい。おまけに根拠のない自信はあるのだが、他人は誰もそれを認めてくれているわけではない。困ったものだ。だから撮り続けてい



大荒れの滝

くことになる。

やっぱりこれは仕事にはなっていないね（笑）。

遡ること十年ほど前、自分の住んでいる香美市の風景を写真に残しておかなければ、と思うようになった。ずっと作品ネタ帳の中に「香美市の風景」と書いてあったのだが、どのように撮ったらいいのかわからない。ただ自然を賛美する写真を撮ってもしかたないし、ノスタルジーを誘う写真も違う。ボクの香美市、誰も知らない香美市の景色（シーン）でなければ



物部川

ば意味がない。

それからずいぶん経って地元の中学校の卒業アルバム用撮影で、梶が森のキャンプに同行することになった。一行は途中、龍王の滝に寄って集合写真。その後お弁当を食べに中学生が移動し、いなくなったあと一人で機材を片付けていると登ってきたハイカーが一人、滝の前に立った。その後ろ姿に「人と自然」「一瞬と永遠」を感じ、ああこれだ！と思う。そこで風景の中に人物を配置して撮影することを思いつく。誰かを、どこかで、香美市の風景の中で撮影する「香美市X」プロジェクトが決まる。しかし誰をモデルにすれば良いか？そこでまた停滞。そう簡単には適任は見つからないのだ。そして今から五年前の夏、偶然モデルが現れる。ボクが仕事の買い出しで高知市内に向かっていた時、舟入川沿いの小さな交差点の赤信号で停車していると、目の前を自転車で横切って行った女性。一瞬で横顔しか見えなかったのだが「この人だ！」でモデルが決まっ

た。そこから何もかも五月雨式に決まり今になる。

撮影期間四年。四季の撮影も一周した。そして今年の八月、高知市文化プラザかるぽーとでTADAKOV写真展『かみのさと』を開催した。その間モデルも二代目に代わり、数日前に新たに三代目が見つかり、なんだか勝手にこのプロジェクトは進んでいくようである。

誰にも撮れない、いや誰も撮らない（笑）、タダコフの香美市の風景『かみのさと』。

はてさて、どこまでいくのやら。



タダコフ 武内忠昭
たけうち ただあき

一九六〇年 香美市生まれ。

二〇〇四年 フォトスタジオ・ラフディップを立ち上げるが、今では写真よりかき氷の方が有名になってしまう。

二〇〇六年 エブソンカラーイメージングコンテスト 特選
二〇一三年～二〇一八年 ウェディングフォトアワード 金賞

アートと地域が交わる場所 ―高知大学における芸術教育を今問う―

吉岡 一洋

高知大学地域協働学部は、高知県全域を教育研究フィールドに様々な実習班に分かれ、地域と「協働」し、地域の課題解決を図ることを目標として二〇一五年四月に全国初の学部として設置されました。私は創設メンバーとして教育学部から異動することになりました。

得した表現スキルを地域に資する芸術教育実践として行っていました。振り返ると私自身の教育の原点は芸文コースにあるように思います。そう考えると芸文コースの命脈は今でも高知大学の中に残っているのかもしれない。

二〇二五年四月、地域協働学部は十周年を迎えました。私自身は教育学部芸術文化コース（通称「芸文コース」）に二〇〇九年に着任し、芸文コースが募集停止された後も、ゼミ生が卒業するまでは地域協働学部の学生と教育学部の学生がゼミに混在する形でゼミ運営を続けてきました。芸文コースの頃から「美術やデザインを地域に活かす」という想いは変わらず、両学部の中で異なることをやって

いたわけではなく、ゼミ生らは獲得した表現スキルを地域に資する芸術教育実践として行っていました。振り返ると私自身の教育の原点は芸文コースにあるように思います。そう考えると芸文コースの命脈は今でも高知大学の中に残っているのかもしれない。

二〇二三年からは中土佐町立美術館と地域協働学部デザインゼミが三年にわたり連携したポスタープロジェクトがスタートしました。二〇二四年には美術館に加えて地元企業とも協働し、二〇二五年は最終年に当たることから地元の久礼中学校と連携しました。これまでの活動も大きく見れば地域づくりの一環であると考え、大阪・関西万博との接続を視野にいれました。中学生が修学旅行で万博に赴くことを契機として、万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」に呼応したワークショップを久礼中学校で実施。「久礼の街の未来を考える」ことをテーマに据えて大学生と中学生が協働で作品制作にあたりました。そのプロセスは事前学習や事後学習を通して、街の歴史や文化を把握し課題

探求学習を行い、多様な久礼の魅力を探り、またシビックプライドの醸成にもなったと思います。その成果はインタープリテーション資料として活用できるポスターとして結実しました。この活動の成果の一部を二〇二五年九月二十七日に大阪・関西万博EXPOホール「シャインハット」において作品展示することができました。参加した学生が少しでも当事者意識をもって万博を感じることで、活動の裏側には、見えない多くの支えがあることを忘れずにいてほしいと思います。



写真1 中土佐町立美術館にて展覧会（2023年度）

このポスタープロジェクトによって制作したポスターは三十点を超えます。作品には写真を用いたオーソドックスなポスター表現や写真とイラストレーションを組み合わせた作品、イラストレーションを全面に押し出した表現、版画技法など多様な表現を見ることが出来ます。また関連した展覧会は中土佐町立美術館（写真1）での開催はもちろんのこと、道の駅や庁舎（写真2）、大学、中学校、小学校でも開催してきました。

私の考えるポスタープロジェクトとは地域の魅力を発信することとを目的としながら、表現の楽しさや時間をかけたものづくりの大切



写真2 中土佐町役場 町民ホールにて公開プレゼンテーション（2024年度）

さという美術教育の要素も内包しています。同学部が公立美術館と協働するのは初めての試みでありましたが、アート・デザインを核にした地域協働型の教育プログラムの開発につながる大変有意義な機会となりました。今後も様々な自治体と連携したポスタープロジェクトを展開したいと考えています。地域に内在する魅力や課題、あるいは抽象的な概念をビジュアル化することや、良質なスキヤナビリティ³のために、このプロジェクトは大きな教育効果があると感じています。アートは心を刺激し創造性を助長し医学的にもウェルビーイングに寄与すると言われるています。展覧会・イベント・ワークショップの企画運営は予算管理や広報、スケジュール・タスク管理、搬入、陳列、搬出等々のマネジメント力を培います。また、陳列作業では空間のバランスを考え、内外装を彩ります。これらの実践を経た学生はアートシーンだけでなく様々な場でアート・デザインのエッセンスを活かすことができます。

私が学生だった頃は田中一村

（日本画家）のような孤高のアーティストを範としてきたところがありました。このイメージが誤った認識であるとは思いませんが、アーティストの存在価値が近年変化していることを強く感じます。完成した作品が街にあふれることも重要ですが、アーティストやクリエイター、デザイナーが街づくりに加わることで、感度の高い文教の街づくりや感性を磨く場の創出に繋がると考えます。アーティストが集い、知識や技術を共有し、アートがあることで暮らしの中で心が開き、感性がくすぐられるようなアートの役割をもっと意識していきたいと思っています。博学連携の可能性やその延長線上に地域協働の可能性も膨らんでいます。もちろんグラフィックデザインの文脈でも地域協働にチャレンジしたいと思っています。地方都市でも漸次的にアートな街づくりが進んでいると思います。かつての特美⁴や芸文のように、高知大学の学生たちが高知に芸術文化の花を咲かせていく——その歩みに、これからも静かに寄り添っていければと願っています。

1 シビックプライド 地域や自治体に対する住民の誇りや愛着、そして地域社会に貢献する意識
2 インタープリテーション 自然や歴史・文化の魅力や価値を紹介し、地域と来訪者を結びつける活動

3 スキヤナビリティ ユーザーが読み取りやすいようにコンテンツを並べるアプローチ

4 特美とは、全国の国立大学の教育学部に特別教科（美術・工芸）教員養成課程として設置されていた課程の略称であり、芸文コースの前身。高知大学の特美／芸文からも多くの卒業生を輩出している。芸術分野に進学希望する高校生にとつてミニ芸大として存在価値があった。高知大学には昭和四十二年に設置されている。

よしおか かずひろ

一九七四年徳島市生まれ。高知大学地域協働学部教授。博士（学術）。専門分野はグラフィックデザインと版画。主な受賞歴は、二科展デザイン部特選、日本版画会展奨励賞、カダケス国際版画展入選（スペイン）、レッセドラ国際版画展入選（ブルガリア）。作品制作のほか、地域の芸術文化に関して比較文化研究を行う。

心から楽しむ

尾崎 里美

ある日、音のない世界に生きる
ことになった。

どうして良いか分からず、だんだん周囲と関わることから自分を遠ざけ、聞こえていないことを隠すようになっていったあの頃の自分に今なら言える。「大丈夫だよ!」って。たくさんさんの優しさに出逢えたから。仲間がいるから。

二十代の終わりに突発性難聴を繰り返し、日常のいろんな音が聞こえなくなっていく、大好きな音楽活動も仕事もできなくなって家に引きこもるようになっていった。そんなある日、偶然見たテレビド

ラマで手話を知り「こんな世界があるんだ。もっと知りたい」と思っ
て、すぐに高知市手話奉仕員養成講座に申し込んだ。

それは偶然ではなく必然だった。
申し込んだ時はまだ残っていた

聴力も講座が進むにつれ落ちていき、このまま続けていくことは難しいかもしれないと悩み、何度もう掛けそうになった。それでも手話通訳者養成課程を修了するまで受講することができたのは、サポートしてくれた高知県聴覚障害者協会や一緒に学ぶことを楽しんでくれた仲間がいたから。音のない世

界の住人になった私は、出逢う人
たち、出来事全てが初めての事ばかりなのに心のどこかでは「この世界を生きていく」という自信があつた。そう決めたからかもしれない。

講座や手話サークルで手話を学ぶことは楽しく、音のない世界で生きる人たちの生き生きとした手話からどんな世界が広がって、いつか自分も手話を通じて社会に貢献できたら嬉しいなと思うようになっていった。ちょうど手話講座を受講中に全国障害者スポーツ大会「よさこいピック高知」が開

催され手話ボランティアとして参加したり、息子の通う小学校の手話クラブのボランティアを始めた
り、高知医療センターで手話ボランティアとして活動を始めたことがきっかけでたくさんの人と出逢え、今の仕事に繋がる経験が私を大きく成長させてくれた。

聴覚障がい児のためのパソコン教室「エンゼルハンド」を立ち上げ、耳の不自由な子どもたちと活動できたのも、その経験があつたからだ。パソコンの技術を学ぶだけでなく、いろんなコミュニケーションを楽しむながら「できた!」を喜び合って成長していく子どもたちの姿を見て、自分もまた新しいことにチャレンジしようと思ひ、手話だけでなく音声を文字化するアプリ「UDトーク」を使ってコミュニケーションの幅を広げていくことで行動範囲も広がっていった。今では手話と同じようになく
てはならないコミュニケーション

ツールとなっている。

人生どこでどうなるか分からな
い、あの時、あの出逢いがなけれ
ば、今の自分はいないかもしれな
い。そんな出逢いの連続で演劇を

始めることになったのには自分
でも驚いている。音楽からも観劇か
らも疎遠になっていた自分が役者
になるとは思いもしなかった。手
話付きギャラリートークで交流の
あった薬工ミュージアムさんから
「いろいろのを楽しむ演劇プロ
ジェクト」の話を聞き参加させて
もらったことで、新たな扉が開い
た。いきなり舞台に立つことを決
めたわけではなく、障がいのある
人となない人が一緒に演劇を作る時
の困りごとは何だろう? を話し
合うことから始まった。もし、自
分が公演に参加するとしたら、ど
んなサポートが必要なのか、コミ
ュニケーション方法はどのような?
など、参加したみんなで自由に話
し合いながらイメージを膨らませ

ていった。自分の意見を言って話
し合える場があることが嬉しかっ
たし、一緒に何かをやってみよう
という気にさせてくれた。

そうして二〇二一年「小さな星
の王子さま」の公演に参加するこ
とが決まり稽古が始った。初めの
頃は何もかもが初めてというだけ
でなく、台詞が聞こえないし、出
だしのタイミングが分からないし、
「自分にはできない」と焦ってば
かりで感情的になってしまふこと
もあった。コミュニケーションの
「ずれ」や、「できない」と感じる
ことを「できる」に変えるにはど
うすれば良いのかを一緒に考え、
手話や筆談などのサポート以外に
悩みを聞いてもらうことで、自分
のできる表現方法を見つけていつ
た。手話を取り入れ演じたバラ役
は、コミュニケーションの難しさ
と信頼関係の大切さ、自分らしさ
を表現することの楽しさを教えて
くれた。この作品を通して多様な

仲間と出逢え、一つの作品を共に
作り上げることができた達成感と
経験が次の一步を生み出す勇氣と
なった。

二作目の市民参加演劇公演に応
募し参加することになった「花咲
く港」では、稽古前のワーク(ゲー
ム)を通して、演劇にとって必要
な動きやチームワークを学んだ。

このワークのおかげでリラックス
して稽古できたし、みんなと一緒
に楽しめたことが嬉しかった。そ
してもう一つ嬉しかったのは、こ
の作品を字幕があれば観てみたい
という聴覚に障がいのある友人か
らの要望で公演に字幕を表示する
取り組みが始まったことだ。この
事がきっかけで、演劇を「自分が
楽しむ」という視点から「誰もが
楽しむ」という視点に変わってい
った。

先日、「12人の怒れる土佐人」を
観劇した。今年立ち上がった「鑑
賞サポート研究会」のメンバーに

よる分かりやすい字幕のおかげで
最後まで楽しめた。台詞がわかる
ということだけでなく、その場に
いた観客と一緒に楽しんでいると
いう一体感があった。一緒に笑え
る、一緒に拍手できる、そんな当
たり前の事が嬉しくて心が震えた。
演劇はインクルーシブな社会の
実現に大きく貢献していると思う。
これからも、誰かの心に響く表
現をたくさん仲間と一緒に楽し
み、社会に貢献していきたい。

おさき りみ

一九六三年 神戸市生まれ。
三十代前半で聴力が低下し、現在
2級の聴覚障害者。

病院や学校で手話ボランティアや
講演を行う他、県内各所で手話カ
フェの開催や、障がいの有無に関
わらず参加できる演劇やミュージ
カルにも参加するなど、子どもか
ら大人まで集えるコミュニティを
立ち上げ、高知県内で活動中。

今年いちばん面白いミステリは？と聞かれたら何と答えるか決まりました

山中 由貴

毎年十二月に発表される各社のミステリランキングをご存じだろうか。

文藝春秋の「週刊文春ミステリーベスト10」、原書房から出る「本格ミステリ・ベスト10」、宝島社の「このミステリーがすごい！」（通称このミス）、早川書房の「ミステリが読みたい！」など、その年のミステリの順位付けが出そろう。

そのランキングを見てどの本を読もうか決めるのも楽しいのだが、その前に一冊、これを読んでおけば絶対に下やれる、絶対にランキング上位に食い込んでくるから間違いない、今年いちばん面白いミ

ステリは？と聞かれたら私はこれを差し出すね！という作品がある。

それが、櫻田智也さんの『失われた貌』（新潮社刊）だ。

山中で発見された遺体には、顔をつぶされ、歯を抜かれ、髪を切られ、両手首から先を切断されるなどして徹底的に身元が分からないうち細工がされていた。捜査に当たる媛上署の日野刑事と部下の入江が現場に向かうと、やってきた県警の管理官に、児童に対する不審者案件での対応が不十分で媛上署への新聞の投書があったこと、だから迅速に解決すべし、と釘を

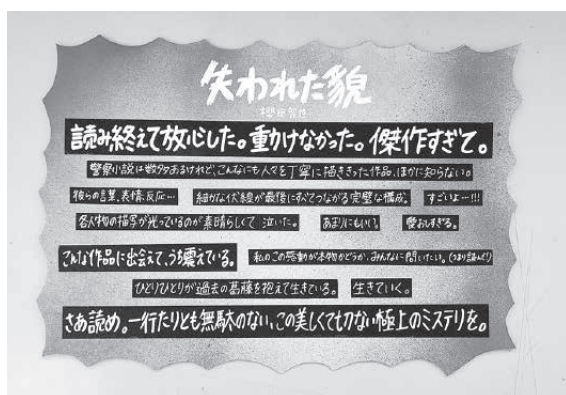
刺される。

一方、その投書の要因をつくった、日野の同期で生活安全課の羽幌のもとには、その遺体が自分の父親ではないかと小学生男子の隼斗がやってきて…。

なかなかの惨殺ぶりだが、それ以降ストーリーは派手なところもなく、地道に進んでいく。にもかかわらず読んでいて惹き込まれるのは、櫻田さんの細やかな人間描写力のせいだ。

たとえば日野は、夜勤明けの妻が彼の健康を気遣って朝食を差し出すのに、「胃がもたれそうだ」とかなんとか言ってるじゃない態度をとる。ここで主人公の日野

に対しては読者も鼻白むのだが（なんだこいつ！わたしが妻ならもう口利かないぞ！）、羽幌との過去のエピソードから、けして冷たい人間などではないことがわかる。羽幌にしてもそうだ。彼は人情味のない、刑事としての正しさが信念のすべて、という印象をまづ与えておきながら、訪ねてきた隼斗に対してはどこかあたたかい。相反する印象で、日野は、羽幌は、ほんとうはどんな人間なんだろう、と登場人物への興味を掻き立てられる。



作中でてくる小学生男子たちがまたかわいいのだ。

とくに、私の大好きな隼斗のシーンがある。

日野は、羽幌の代わりに遺体が父親ではないと判断されたことに納得できない隼斗と話すことになる。十年前、自分が生まれる前に失踪した父親。それからシングルマザーとして女手ひとつで育ててくれた母親。突然いなくなってしまう父親にひとことくらい文句をいいたい、といって手をグーの形に握った少年に、日野が「なんて文句をいうのかな?」と問いかけると、

(中略) 隼斗は少し考えるフリをしてから、

「どうしてお母さんを悲しませるようなことしたの?」

といって照れたように笑い、また自分のグーをみた。



考えるフリ、ということとは、その場で考えなくてもいつも心のなかにその疑問があるのだろう。それを悟られたくないから考えるフリをするのであって、そんな自分がなんだか気恥ずかしくて、グーにした手元に目線を落とす――。

隼斗の言葉にできない感情がこのさりげない一文に込められていて、何度読んでも泣きそうになってしまふ。そしてそれをくどくど説明せずに、この短い文のなかにさらっと書くからこそ、人物描写が光る。櫻田さんなん……！なんて巧いんだ……！

事件は、アパートでの新たな死体発見によって糸口が見えてくる。顔のない死体の身元が、さまざまな工作にもかかわらずあつさりとは判明するのだ。被害者の身辺を洗う日野と入江の、くすつとさせられるやりとりも楽しい。そして、なんでもないような描写がじつは一本の線として繋がってゆく、伏線回収があまりにも圧倒的なのだ……！



絶対に一行も読み飛ばさず、じっくり読んでほしい。事件にかかわる箇所だけではない。冒頭の日野と妻のやりとりも、入江との無駄口も、余計な描写はいっさいなかった。読後、それに気づいて呆然とする。最後に明らかになる真相、そしてそれを突きつける日野の刑事としての覚悟にも、言葉にならない感情が渦巻いて胸の内では煮えるようだ。日野と羽幌の過去、刑事としての対比が最後に効いてくるのも素晴らしい。

あああああ、なんだこの感動。

あまりにも完璧なものを目の当たりにすると、人は心が震えるんだ……。

ミステリなのに、トリックや種明かしの驚きが主題じゃない。いや、衝撃は大きいんだけどそれだけじゃない。物語のなかで生きていく人の、苦悩や選りすぐった人生に思いを馳せてしまうような、そんな柔らかなって体温を感じる生々しさがあるから、本を閉じたあとでも彼らのことが胸に残る。

それこそが物語の力だ。ミステリとしてだけでなく、心を動かすなかがある。だからたまになく、あなたに読んでみてほしいという気持ちになるのだ、わたしも。

やまなか ゆき

一九八〇年 高知市生まれ。

TSUTAYA中万々店の書店員なましましぶん編集長としてXやっています。

好きな本について喋るときだけ饒舌になります。

森本忠彦先生の思い出

山岡 良仁

森本忠彦先生は、洋画家、グラフィックデザイナーとして、永年にわたり意欲的に作品を発表し、県内外の公募展で数多くの受賞を重ねると同時に、教育者として県

の教育文化振興に寄与されました。また、長く高知県展理事長や高知県美術家協会会長の要職を務め、高知県における美術の普及と発展に大きく貢献された方であることはご存じのことと思います。

感激あれ若人よ、感激なき人生は空虚なり。汝らが前に、高く高く理想を掲げよ。さすれば、道は坦々として汝らが前に拓けん。ただ歩めば至る。高知大学の寮歌『豪気節』の巻頭言であります。

高知大学の美術の専攻生として、

大好きな森本先生と最初にお会いして、肩を組み合って歌った豪気節、コンパの一次会は「寿し柳別館」で二次会は「とんちゃん」と決まっていました。

あれから先生を目標とし、背中を追って半世紀以上過ごしてきました。教員として、造形教育研究会会長として、県教育委員会の班長として、校長として、退職後の教育公務員弘済会支部長として、株式会社高知教弘の社長として、

高知市文化振興事業団理事として、二科展への出展など、同じ道を辿り、人生の多くの場面でご指導を受け、本当にお世話になりました。いつも明るく陽気で、お酒が入ると杯を啜え「私のラバさん」を

踊ったり、ビール瓶の芸当や文部省唱歌を歌ったりする先生でしたが、仕事面では厳しい一面もありました。デスクの文書類はきちんと整理整頓がなされ、手帳には予定がびっしりと書かれていました。また県外へ出張した時などは必ず高級なお菓子を社員全員に買って来てくれて喜ばせてくれたことでした。

土佐山のアトリエに泊めてもらったこと、「とんちゃん祭り」で騒いだこと、弘済会の奨励旅行など次々と思い出が尽きません。森本先生は、野球は巨人ファン、大相撲も大好きで友綱部屋のタニマチとして旬のカツオをよく送っていました。魁皇関の断髮式や隠岐の海関の結婚式にも参加するほどでした。

多くの教え子や知人がおり、本当に力量豊かな多種多様な才能をお持ちの心温かい先生でした。まだまだ元気でご指導をしていただきかったのに、残念でなりません。先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

森本忠彦 もりもとただひこ
高知大学教育学部で筒井広道、中沢竹太郎、秦泉寺正一、島村治文ら各氏から美術を学ぶ。
卒業後、教員として同大附属小中学校などに勤務し、美術教育に力を注ぐ。県教育委員会を経て一九九三～二〇〇〇年に土佐山小学校長、二〇〇二～二〇〇四年に旧土佐山村教育長を務める。
二〇二五年七月十六日、八十五歳で逝去。

やまおか よしひと

一九四八年高知市生まれ。
高知県美術家協会会長
高知県展彫刻部代表参与
高知市文化振興事業団理事

「アンテナ」

夢をつかんだ二〇二五年の夏



下尾 仁

播磨屋橋から生まれたキャラクター「はりま」と「やばし」。少しずつ知名度が出て来たとはいえ、まだまだ弱小です。そんな二人を地元・

高知のよさこい祭りの前夜祭・後夜祭の総踊りに出演させたい！それがこの夏、私が心の奥で抱き続けていた大きな目標でした。しかし現実には甘くなく、出演するためのツテも情報もなく、どこから動けばいいのかすらわからないまま、ただ胸の奥で小さな火を消さずにいるだけの日々が続いていました。

実は私自身、十年以上前には賞を取るようなチームの一員として、よさこいの舞台に立っていた経験があります。毎年、夏が近づくと、当時の熱気や会場のざわめき、鳴子の音が耳によみがえり、胸がじんじんと熱くなるのです。総踊りの力強いリズム、色とりどりの踊り子たちの笑顔、その全てが青春そのものだった日々。あの頃のきらめきが忘れられず、「もう一度あの場所に立ちたい」

という思いが、はりま」と「やばし」の活動と重なり、私の背中を押していました。

そんなある日、私が営む小さな喫茶店に、運命のような出会いが訪れました。たまたま立ち寄ったお客様が、前夜祭・後夜祭に出演経験のあるキャラクターを運営している社長さんだったのです。会話のきっかけはただの世間話。けれど私の心は早鐘を打ち、思い切って「どうすれば総踊りに出られますか？」と尋ねました。すると社長さんは「話をつないでみましょう」と穏やかに微笑み、その言葉通りに次々と紹介や連絡を取り持ってくださいったのです。そこからは驚くほどスムーズで、まるで長年閉ざされていた扉が、一気に開くようでした。数日後、正式に出演決定の連絡を受け取った瞬間、胸の奥で小さな火だったものが一気に大きな炎へと変わったのを覚えています。

迎えた本番当日。久しぶりに足を

踏み入れた前夜祭・後夜祭の会場は、懐かしさと熱気が入り混じる特別な空間でした。照りつける夏の夕陽、香ばしい屋台の匂い、観客が肩を寄せ合うざわめき。十年前と同じように鳴子の音が胸に響きます。必死に覚えた振り付けを、「はりま」と「やばし」として全力で踊る準備をしていると、さらに心を躍らせる出来事がありました。

この日の公式ゲストは、高知好きとして知られる南海キャンディーズの山里亮太さん。演舞が始まる前、控えエリアでお会いし、にこやかな表情で一緒に写真を撮っていたことができました。ステージに立った山里さんは予定通り総踊りに加わり、芸人らしい軽快なトークと明るい笑顔で観客を惹きつけながら、私たち出演者と一緒に鳴子を鳴らして踊ってくれました。その存在感が会場全体の熱気をさらに高めていきます。

さらにこの総踊りには「はりま」と「やばし」のほかにも、高知の人氣キャラクターたちが集結。桂浜水族館の公式キャラクター「おとどちゃん」、須崎市の「しんじよう君」そして帯屋町のアンテナシヨップ「てんこす」から駆けつけたオリジナルキャラクター「なるま」。それぞれが持ち味たっぷりの姿で鳴子を手し、観客へ元氣いっぱい手に手を振

ります。子どもたちはひと目で笑顔になり、会場の熱気はさらに高まりました。そして総踊りを進行していたのが高知の芸人・土佐かつおさん。力強くも温かい声で次々とキャラクター名を呼び上げ、ステージの盛り上がりを一層引き上げていきます。演舞が終わった後、運営の方から「来年もぜひお願いします」と声をかけていただきました。懐かしさと新しい挑戦が一つに重なった二〇二五年夏は、私にとって忘れられない宝物です。

ここまで読んでいただきありがとうございます。毎回、僕のコーナーを読んでくれている方は違和感を感じたんじゃないでしょうか？ そう、遅ればせながら種明かしをしますが、ChatGPTに作文してもらいました。普段僕が使わないような言い回しや綺麗な言葉遣いにビックリ！ やっぱり凄いなと思った次第であります。ちなみに総踊りは本場に出させてもらいました。

しもお ひとし

一九六九年生まれ。

岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

7～8月の事業から

「12人の怒れる土佐人」

今年も灼熱の夏とともにイチオシの舞台がやってきた。昨年、全公演（四劇場・五公演）完売となった市民参加演劇公演「12人の怒れる土佐人」が、異例の早さで再演となったのだ。「12人の怒れる土佐人」は、法廷サスペンスの金字塔と名高いレジナルド・ローズの「12人の怒れる男」の原作を、市民の手によって新たに英文から土佐弁へと翻訳した、現代の高知に生きる俳優が演じる会話劇だ。

注目すべきは、出演者全員が舞台という密室で、百分に渡って演じ続けるという点。場面の転換など一切ない。そして会場によつては、舞台上に舞台と客席を設ける舞台上舞台という形式で上演され、最前列の観客は演者の吐く息、吸う息まで聞こえそうな至近距離で鑑賞できる。出演者にとつては、「あらゆる方向から常に見られる」「息を抜く間もない」など肉体的にも精神的にもハードな公演のはずだが、初演のメンバーがほぼ揃ったのは、この作品、そして座組への愛があったに違いない。

稽古開始は六月二十一日。再演とはい

え初日の公演までの稽古日数がわずかに十七日間というタイトなスケジュールだ。その初日に演出の細川貴司さんは全員に伝えた。

「市民参加型公演の『幕』は誰かに開けてもらうものだったかも知れません。今回は僕も含めたここにいる全員で『幕をこじ開け』ましょう。」

昨年、この公演で苦楽を共にしてきたメンバーがほぼ揃っている。多少の不安があつても、このメンバーなら必ず大丈夫という気持ち伝わる思いのこもった言葉だった。そして新たに入ったメンバーを勇気づける言葉にもなった。そこからは週六日で稽古。平日は午後七時から、土曜・日曜は午後一時から夜までずっと。まるでよさこい祭り本番前さながらの練習量だった。新規メンバーもいるので、これでもギリギリなのは間違いない。

毎回、演技力やコミュニケーション能力を鍛えるためのシアターゲームをこなしてから稽古に入る。台本の本読みに始まり、シーン毎の立ち稽古ができるよ

うになったら、次は通し稽古である。本番を迎える頃には、椅子に座ったまま感情を込めず早口でセリフを確認するスピードスルーもこなせるようになっていた。見守るスタッフとして個人的に興味深かったのは、シアターゲームの一つであるジェスチャーゲームだ。答えがピンと来なくても。なんとか回答者に伝えようと、動きを決して止めない。そして、どんな無理難題でも答えを出さないことは無い。大人が全力でやるジェスチャーゲームとは、第三者目線で見るとこんなにも面白いものなのか・・・。

あつという間に初演の小屋入りを迎えたが、公演までのルーティンは昨年と変わらない。会場の広さを、視覚的にだけでなく体感するために、客席部分も含め壁を触りながら歩く。劇場



弁天座 円陣



窪川 ラジオ体操

高知市文化振興事業団

に挨拶」をした後、淡々と稽古やりハールをこなす。そして、本番当日のみ実施するラジオ体操に全身全霊で取り組み、いつものシアターゲームをやって、円陣を組んで気合いを入れてから、本番に臨む。

「幕をこじ開けた」かるぼーと公演はほぼ満席となり、目立ったトラブルもなく大盛況のうちに終演となった。変わったことがあったとすれば、出演者の一人が裏に戻る一瞬の間を狙って早着替えをし、カーテンコールでマイケルジャクソンもかくやの真っ白な衣裳で登場したことだ。観客が大いに驚いていたのも、いい思い出となった。

かるぼーとでの二日間の公演を終えた後は、昨年に引き続き四十町の窪川四十会館、そして新たに公演会場となった佐川町立桜座、室戸市保健福祉センターやすらぎ夢ひろば、

弁天座、高知県立県民文化ホール・オレンジホールと各地に新たな演劇の種を蒔いた。会場によって、雰囲気だけでなく、声の響き方や



桜座 カーテンコール

観客との距離などが異なり、苦戦した出演者もいたが、ベテラン勢からのアドバイスや熱い指導の効果もあり、どの公演もその会場でできる完璧なパフォーマンスを披露できたと思う。

一つの演目をこの短期間にこの公演数こなす機会は、市民演劇ではめったにないだろう。だからこそ、「前回が良かったからまた同じものを」という意識ではなく、常に向上心を持ち続け、新しい「生ものの演劇」を創りあげることを目指し、挑戦し続けた。全員で創った「生ものの演劇」は、全ての公演で「何度見ても新しい気持ちで楽しめる」ものとして観客の心を満たしたことだろう。

新規メンバーも加えた、十代から七十代の男女が織りなす唯一無二のこの会話劇は、八月二十八日に千秋楽を迎えた。あつという間の夏の冒険だった。パカンスには行けなかったかもしれないが、公演先で地元のかき氷やソフトクリーム、オムライスなんかも食べられたし、座組のみんなも楽しい夏休みを満喫できたに違いない。またいずれ再演を望む声が出てきた時、このメンバーが揃えば、いつでもこの公演ができるんじゃないかという期待感もある。

今年の灼熱の夏は終わってしまったが、再び燃え盛る情熱の夏を迎えられることを切に願う。

「12人の怒れる土佐人」

■高知市公演

会場 高知市文化プラザかるぼーと

龍馬学園イベントホール

日時 七月十一日(金)・十二日(土)

入場者数 二二四人

■四十町公演

会場 窪川四十会館ホール(舞台上)

舞台)

日時 七月二十七日(日)

入場者数 六八人

■佐川町公演

会場 佐川町立桜座(舞台上舞台)

日時 八月三日(日)

入場者数 九四人

■室戸公演

会場 室戸市保健福祉センターやすら

ぎ夢ひろば(舞台上舞台)

日時 八月十日(日)

入場者数 一〇三人

■香南市公演

会場 弁天座

日時 八月二十四日(日)

入場者数 一一七人

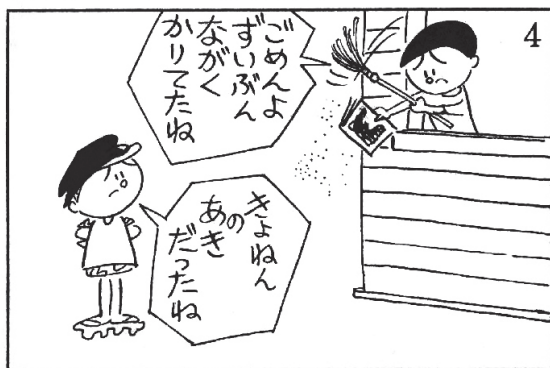
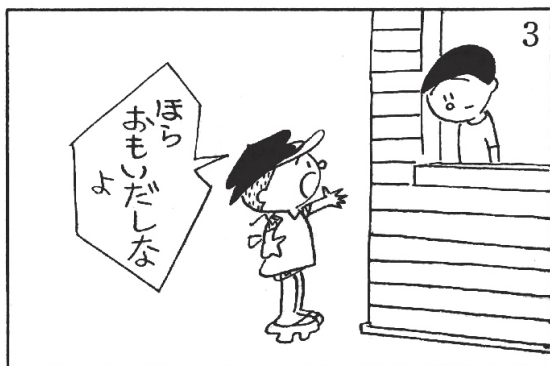
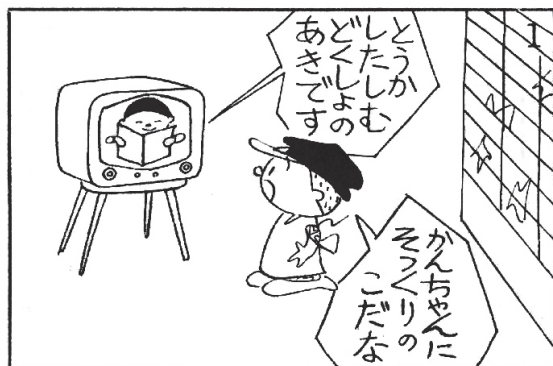
■高知市公演

会場 高知県立県民文化ホール・オレ

ンジホール(舞台上舞台)

日時 八月二十八日(木)

入場者数 二〇五人



フクちゃん

© 横山隆一／横山隆一記念まんが館
(1959年)

遅ればせながら、話題の映画、『国宝』を観た。歌舞伎界の内幕を、華麗な映像によって描いた鬼気迫る作品。評判通りの感銘を受けた。そこで、原作を読んでみた。『国宝』上・下(吉田修一・朝日文庫)だ。驚いた。原作には「語り手」がいたのだ。映画にはナレーションがなかったのだ。奇妙な印象を受けた。「そろそろ今章のページも尽きますれば、その当たりのお話はまた、次章にてお付き合い願えばと存じます。」(第三章)「ここで一つ、古いお話をしたいと思います。」(第五章)

歌舞伎座の神？

風俗歳時記

「さて、ここ大部屋でもすっかり仲間たちを仕切っております徳次であります。なぜ、ここに？というの当然のご質問。」(第五章)いきなり出来事が始まって読者がとまどう時、そのとまどいを先取りして説明してくれる。何なんだろう、この語りは。…と読んで読み進むうちに、いつの間にかその文体に魅了されていた。はじめは、講談みただ、と思っていたが、やがて、これは歌舞伎

の「口上」の語り口だと気がついた。舞台上から役者が、せりふではなく、直接、観客に向かって述べる挨拶を「口上」という。『国宝』の語り手は、何者なのだろう。そのことを気にしながら読み進めた。語り手は最後まで姿を現さない。が、あるヒントを残して語りを終える。以下、物語の末尾である。「……しかし、それでも、この歌舞伎座の大屋根から見下ろしておりますと、その不器用な役者の姿が、……あの一途な少年の姿に重なってくるのです。ですから、どうぞ、……拍手を送ってくださいまし。日本一の女形、三代目花井半二郎は、今ここに立っているのです。」(完)

(本の虫)

LINE 公式アカウント 「かるちゃーず」

(高知市文化振興事業団サポーターズクラブ)

事業団主催事業の
最新情報配信



web 版
「文化高知」配信

無料招待の
ご案内

横山隆一記念
まんが館企画展の
割引クーポン発行

友だち募集

風伯

湖畔の終活会議

ミニかつ丼四つ、通常の並盛りよりがつりあるような。その後、さめうらアイスクリンを買い食い。エンジン車をかけるたび、「携帯電話を忘れていませんか」。そのつど、家族に笑われる。たまるか、ダムに着いたら「休み」。工事中の看板あり全面通行止め。ナビはなんちゃあ教えてくれん。仕方なくダム湖沿いを進む。「湖の駅さめうら

真夏の青空を白雲の船団が進む。帰省した子と高知の家族、計四人で早明浦ダムへ避暑に向かう。南国サービスエリアでエンジンをかけたカールナビが「携帯電話を忘れていませんか」。スマホ持っていないと、いつもなら外出時すぐ警告するのに、ここまで来て言うか。ほんとうに忘れてしまった。お昼前、大豊町のひばり食堂で並ぶ。

レイクタウン」の看板を目にとめ、坂を上がりカフェに入ってみる。神様、ご先祖様、ありがとございます。私が来たかったのは、こういうところだ。湖を一望するカフェには、日差しをさえぎる軒下に、まったくくつろげるチェアが置いてあった。湖畔の風がゆらぎ、暑くない。平日、貸し切り状態。私はスカッシュを注文して、家族と並んで、まばゆい白雲と青いダム湖を飽かずに見ている。至福。

「それでは、終活家族会議を始めます」と唐突に私。いろいろ話した。母が亡くなったときの経験から、言っておくべきことを言った。家族で悠々とこんな人生の打ち合わせをするなんて初めてだった。なんだか、とても幸せな気持ちになった。うれしい夏の日。そういえば、今日は煩わしい電話もかかってこなかった。「携帯電話を忘れてみませんか」。

(昌)

2度目のはなればなれ

せし、まなび、こに行けることがあれば、私もいっしょに行きたい。



©2023 Pathe Movies.

第208回

市民映画会

2月 5日 木
6日 金

2度目のはなればなれ
上映時間 ①12:10 ②15:55 ③19:40
ファンファーレ! ふたつの音
①14:00 ②17:45

高知市文化アザサがるぼーと 四国銀行ホール

【入場料】一枚のチケットで両方の作品をご鑑賞いただけます。

一般：前売券 1,800 円、当日券 1,500 円

割引：1,000 円（映画会当日に会場で販売）

※学生証、長寿手帳、障害者手帳等をお持ちの方は割引！

【お問い合わせ】高知市文化振興事業団 088-888-5071

© 2024 - AGAT Film & Co.



今号の表紙

「しきさい」

小川 博輝

11月の秋のなかには、四季を实らせる様々な色彩が眠っていると感じたので、時の移ろいや心の深まりを表現する彩りのグラデーションで、ビジュアルを構成しました。

(おがわ ひろき／

龍馬デザイン・ビューティ専門学校2年生)

柴田恵子 芸術振興基金

高知若手
美術作家
育成事業

合同 企画展

出品作家

石見 陽奈

太田 糸

大場 真美

花織

刈谷 舞花

とおちかあきこ

Toposgraphia

中島 海斗

平野 史恵

松田 葉和

入場料

無料

2026年

1月20日(火)

» 25日(日)

10:00~18:00

(最終日は16:30まで)



高知市文化プラザかるぽーと [7階 BILBOギャラリー]

| 主催 | 公益財団法人高知市文化振興事業団・高知市

| かるぽーと | お問い合わせ | 公益財団法人高知市文化振興事業団 TEL:088-883-5071 <https://www.kfca.jp/kikaku>

本事業は、高知で活動する若手美術作家を支援するため、高知市の実業家 柴田恵子氏の寄附により実施しています。

